

## キーワード16 自己有用感

Gさんは養護学校中学部の2年生である。知的障害があって、会話は質問に答えるのがやっとであった。展覧会の準備に入ったある日、担任のH教諭がGさんに話しかけた。

H教諭：「ねえ、Gさん。小学部のみんなが絵を描くんだけど、そのための牛乳パックの紙すき作りをやってくれないかな。」

Gさん：「……」

H教諭：「Gさんなら、できるよ。先生も一緒にやるから。」

Gさん：「うん。」

こうして、Gさんに紙すきを任せることになった。先生と同じことができる。それを自分に任されているんだという自信からか、Gさんは他の場面でも積極的に活動するようになっていった。

展覧会では、Gさんは、自分がすいた紙に描かれた小学部の作品を見て大満足であった。

自分から話しかけることなどなかったGさんが、2学期末、「先生、年賀状を牛乳パックで作ったので、出さね。」とH教諭に言った。届いた賀状には、

「学校が楽しいです。」  
と書いてあった。



「みんなの役に立っている。」という気持ちは、集団での存在感を充足し意欲的な生活へとつながります。

### 自己有用感とは

自己有用感とは、「自分自身のよさを認め、自分を肯定的に受け止めることができる存在感。」と定義付けることができます。自分が所属する集団から、承認・賞賛・感謝・支持などを受けることによって、自己評価を高め、その集団において安定した存在感を得ることができます。

### 「私も役に立てた」

学級の中で、自分が役に立っているという役割体験を実感できることは大切なことです。事例でも、Gさんは「先生から任された」仕事ができただけでなく、友人の賞賛の声を聞き、ますますやる気を起こしています。

そして、それが更に他の場面での意欲的な行動へと結びついています。

### 友達相互の肯定的な評価

低学年のうち、保護者や教師といった人からの評価が大きく影響しますが、だんだん学年が上がるにつれて、仲間や友達からの評価が気になるようになります。

「仲間から認められた。」「自分がした事で、仲間が喜んでくれた。」「自分の発言にみんながうなずいてくれた。」など、級友から承認を受けたり、感謝されると自己評価が高まります。

こうした、友達相互の肯定的な評価が表現できる場や雰囲気のある、温かな人間関係で結ばれた学級作りが大切です。